

日に日に緑が深まってきました。夏はすぐそこです。
今年度、甲南大学人間科学研究所は
「心理療法と超越性」と「性的差異の社会的未来」
という2つのテーマで研究活動を進めています。
7月と9月にそれぞれのテーマでシンポジウムを行い、
年度末には叢書にまとめ、成果を世に問います。
ニュースレター第12号では、この2つのテーマの
シンポジウムに向けた研究会の様態をお伝えします。





私たちが昨秋より進めている研究テーマの一つが「性的差異の社会的未来」。このテーマではとくに「暴力」が焦点となっています。性的な差異が権力関係と結びついて生み出す暴力はDVに顕著であり、現代社会が抱える問題の一つといえるでしょう。もちろん暴力は様々な権力関係によって生じるもので、また、いたる時代にいかなる場所でも発生します。いったい暴力とはどのように生まれるのでしょうか。今回の研究会では、饗庭千代子氏と上村くにこ氏に、暴力の起源、暴力のジェンダーを古代ギリシアに探っていただきました。

紀元前700年頃、神々や英雄の口承物語がヘシオドスによって体系化され文字化されました。それがギリシア神話の宇宙観の原典とされる『神統記』です。そこには原初の混沌＝カオスからの世界の創造、神々の系譜、ウラノス・クロノス・ゼウスの三代にわたる政権交代劇が描かれています。ガイア（万物の母）は夫ウラノスによる子どもへの仕打ちを怨み、末子クロノスに父親を去勢させます。今度はクロノスが自分の子どもからの反逆を恐れ、子が生まれてはすぐに呑み込みます。そこで再びガイアは策を練り、やがて父を殺すことになるゼウスを救います。このように交代劇は血なまぐさい暴力の連鎖によって成立します。ここに見出されるのは「子を畏れる父」「父を倒す子」、そして「子の救済・父殺しを謀る母・妻」の姿です。

そもそも『神統記』が編纂された目的は、主神ゼウスの時代に秩序と平安の確立を言祝ぐことにあります。したがってこの書物はゼウス政権の正統性、無謬性を強調するのですが、それは暴力を正当化することでもあります。饗庭氏は、平和主義者であるヘシオドスがこの点に矛盾を感じているのではないかと指摘します。というのは、彼が平和を強調する『仕事と日々』の冒頭で復讐の神・エリニウスと競合の神・エリスについて語り、暴力の本質を説いているからです。それによると、この二神はカオスから生まれたのですが、実は一つのもの二つの顔なのです。つまり、暴力には戦争を引き起こすような悪い面と、競争による切磋琢磨を促す善い面が融合しており、その境界はあいまいとされます。こうした暴力が神々において描かれていることから、暴力は二面的かつ必然的なものとして人間へとそのまま持ち越されたのだらうと氏は述べます。そして、この二面性のバランスをとるのがガイアだと考えられます。ガイアは母・妻としてその時々的情勢に合わせて態度を変えながら、暴力の行き過ぎを回避する機能を果たしているのです。また、神話には男神女神を問わず、戦わない神、暴力を回避する神も存在します。これを現代に読み込めば、暴力は抹消できる体のものでないことが認識され、むしろ暴力の行き過ぎを制御するような力を働かせることで、非暴力の可能性をさぐることができるのではないかと、締めくくりました。

続く第2部では3世紀後のギリシアに舞台が移されました。そこではペルシア戦争に勝利したアテナイが中心ポリスとして経済的・文化的に興隆し、ギリシア神話などをもとにした悲劇が多く書かれ上演されました。上村氏は様々な作品を紹介しつつ、また実際の上演舞台の録画を提示しつつ暴力のジェンダーを論じました。

1970年代後半以降の研究が明らかにするように、実はギリシア悲劇は政治的行事です。費用は国が負担し、全市民が3日間続上演を観られるよう補助金も出しました。その目的はアテナイ市民としてあるべき姿を悲劇によって教育することにあります。フェミニズムによる研究は、それが男性／女性、市民／非市民、善／悪の二項対立を峻別し描くことによる国家システムの強化と見ます。氏はこの見方を肯定しつつも、次のような疑問を提示します。ギリシア悲劇を政治のプロパガンダと見る限り、悲劇が与える圧倒的な衝動力が説明できない、と。この疑問を解くべく、氏はフランスの古典学者ニコル・ロローを援用します。ロローはギリシア悲劇が政治性と同時に反政治性を有していると述べます。その理由は上演の場所がアゴラではなく神域に近い劇場であることに求められます。アゴラでは市民が連帯し協調して平和・秩序が保たれるのに対し、劇場では分裂が誇張され展開されます。つまりギリシア悲劇は民主主義を謳う政治劇でありつつ、政治の裏でうすまき分裂や暴力を描き、政治の中心から離れた神域で観賞されるのです。ここではポリスを否定し、破壊する者が主人公となります。その役割の多く

いま ギリシアが現在を語りだす ——暴力の起源・暴力のジェンダー——



講師：饗庭 千代子

（甲南大学非常勤講師／フランス文学、ギリシア神話）

『『神統記』に暴力の起源をさぐる』

上村 くにこ

（甲南大学文学部／神話論、ジェンダー論）

「ギリシア悲劇に暴力のジェンダーをさぐる」

企画：上村 くにこ

日時：2007年1月26日（金）16：30～

場所：甲南大学18号館3階 講演室

が女性です。なぜなら女性は非市民であり、またギリシア神話では英雄の蔭に隠れた脇役にすぎず、と同時に、出産する者として死に近い存在だからとされます。

さらに上村氏は暴力・死・狂気がどのようにジェンダーと結びあわされていたのかを述べました。氏によると、叙事詩においては死に方はただひとつ戦死であり、それは男性にのみ許された美しい死に方です。一方悲劇において死ぬのは圧倒的に女性が多く、それは自殺、他殺、あるいは生贖です。女性は殺す側でも殺される側でも激しく、その暴力はすさまじいものです。彼女たちのなかには神格化されるものもあるのですが、それは崇められるというより畏られる存在としてです。こうして民主制が隠したい一番のもの、すなわち「死」を、ギリシア悲劇が女性たちを通して見せているのだ、といひます。最後に上村氏は、苦しみのための暴力を忘れることができるほど我々の文化は進歩してはいないだらうと締めくくりました。こうしてみると、ギリシア悲劇は遠い時代の遠い国の物語ではなく、現在我々が直面している我々自身の暴力、ジェンダーに通じているといえます。

問題は、古代ギリシアで政治的に峻別されたジェンダーを現代においてどう受け止め、そこから何を学び生かすことができるのか、そして、現代のガイアをどこに見出すかです。秋に予定されているシンポジウム、そして来春に出版する叢書では、さらにこの点を問わねばならないでしょう。

ユング心理学と超越性

——「魂」と時間——



講師：名取 琢自

(京都文教大学人間学部／臨床心理学、ユング心理学)

企画：横山 博

(甲南大学文学部／精神医学、ユング心理学)

日時：2007年4月20日(金) 16:30～

場所：18号館3階 講演室

2007年度最初の研究会は、昨年から始まった研究テーマ「心理療法からみる現代の危機」。コーディネーターである横山博氏は「超越性」という観点から現代の心理臨床を問い直し、それを通じて現代社会の危機に迫ろうと研究会を重ねてきました。

今回講師としてお招きしたのは、ユング派の分析家候補生である名取琢自氏。ユング心理学の立場から心理療法を実践されています。氏はその中で超越性をどのように感じ、考えられておられるのでしょうか。実はユング自身が「経験の知を超えたことはあまり語りたくない、それは分からないのだから」とあえて「超越」というものを語りたがらなかったため、「ユング心理学と超越性」というタイトルを掲げるのは、非常に難しいことだと氏は言います。そこで自身の具体的な経験から「超越性」にアプローチされました。

名取氏はかつてスイスのユング研究所に留学していました。その間、ユング心理学で重要とされている夢やイメージなどに集中的に取り組んでいました。その中で、自身を構成する「矛盾」について考察を深め、自分なりの概念を何かつかもっている時に、何か宇宙的なものが視覚的に目の前に現れてきたと言います。「最初は出てくる順に追いかけるが、それでは追いつけない(見えない)次元が出てきた。そして最終的に見つけたのが二重の、普通なら相容れない矛盾したものであった」。宇宙全体を継時的にスキャンするには、それがあまりに大きいものであるため光速をはるかに超えたスピードと、無限大の身体が必要となります。猛スピードでスキャンを行っている、そのような継時的な把握を越える瞬間が訪れたと言います。それは自身が日常の意識を越えて、「矛盾そのもの」になるという無時間的な瞬間でありました。この体験が一体何を意味するのか探していたときに、ユングの『黄金の華の秘密』に似たような体験についての記述を見つけました。氏は、この体験をヴィジュアル化したものがマンダラではないかと言います。

一般にマンダラとは maNda が「本質、真髄、エッセンス」の意であり、la は「もつ」ということ、すなわち「本質をもつもの」を意味します。ユングは、マンダラの認識により、現代的意識の一回性と生命の太古から伝わっている根源的過去性とを融合させることが可能になる、と説明しており、名取氏はこれがユング心理学における超越性と関係していると読み解きます。

例えば、一定の期間心理療法をしていて終結ないし中断した場合、後から振り返ってみると初回の受理面接ではセラピストもクライアントもそれ程気に留めていなかった非常に重要なことが、既にそこで語られていたことに気づきます。このことは心理療法家の報告からよく聞かれることで、名取氏は「大事なものはすべて最初に存在している」と繰り返し語ります。ユング自身も「どんぐり理論」*などで示唆している通りと言えるでしょう。

しかしながら、最初に見えている全体像を人間の認識力で捉えるのは非常に困難なことです。ユングも「経験的側面についていえば、全体性はその個々の部分においてしか経験されず、それもこれらの部分が意識内容である場合に限られている。ところが全体性はまさしく全体性であるがゆえに意識を超越するものである」と述べています。つまり、光速をはるかに超えたスピードで無限大の身体が必要なほどに、最初の全体像があまりに大きいのです。したがって、大切なのは心理療法の早い段階に一瞬で全体像を感じ取り、その後一つ一つを継時的に理解していくことであると氏は論じます。

心理療法に携わる者として、この点は頷けるものであると同時に今後の臨床活動に活かしていくべきものと思われます。今回の研究会での議論が、夏に行われるシンポジウムにどう織り込まれ展開されるのか、非常に楽しみなところであります。

*「どんぐり理論」：一つのどんぐりの中に榎の木全体が内包されているという考え方。

● これまでの活動

研究会

- 第38回 ギリシアが現在を語りだす**
——暴力の起源・暴力のジェンダー——
開催日：2007年1月26日(金)
講師：上村くにこ(甲南大学/神話論、ジェンダー論)
饗庭千代子(甲南大学国際言語文化センター/
フランス文学、ギリシア神話)
企画：上村くにこ
- 第39回 境界性人格障害の心理療法過程にみられる超越性**
開催日：2007年2月16日(金)
講師：横山 博(甲南大学/精神医学、ユング心理学)
企画：横山 博
- 第40回 ユング心理学と超越性——「魂」と時間——**
開催日：2007年4月20日(金)
講師：名取 琢自(京都文教大学/臨床心理学、ユング心理学)
企画：横山 博
- 第41回 超越としての自己性——統合失調症の臨床から**
開催日：2007年5月18日(金)
講師：木村 敏(河合文化教育研究所/精神医学)
企画：横山 博

その他の企画

- 第4回 心理臨床ワークショップ**
加害少年への援助
開催日：2007年3月4日(日)
講師：藤岡 淳子(大阪大学/非行臨床心理学)
企画：森 茂起
共催：甲南大学心理臨床カウンセリングルーム
後援：兵庫県臨床心理士会

● これからの活動

公開シンポジウム

- 第8回 「心理療法と超越性——神話的時間と宗教性をめぐって」**
日時：2007年7月22日(日) 12:40～17:30
場所：甲南大学5号館1階511教室
シンポジスト：河合 俊雄(京都大学/臨床心理学、ユング心理学)
木村 敏(河合文化教育研究所/精神医学)
上村くにこ(甲南大学/神話論、ジェンダー論)
鎌田 東二(京都造形芸術大学/宗教哲学、神道学)
指定討論：垂谷 茂弘(舞鶴工業高等専門学校/人間論、哲学)
横山 博(甲南大学/精神医学、ユング心理学)
司会：森 茂起(甲南大学/臨床心理学)
企画：横山 博
※参加には事前の申込が必要です。申込方法はホームページ
<http://kihs.konan-u.ac.jp> をご覧になるか、電話で
お問い合わせください(078-435-2683)。

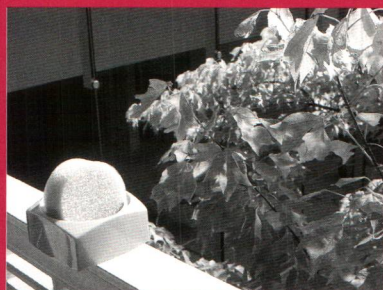
特別企画シンポジウム

- 「暴力神話と女神」(仮題)**
日時：2007年9月22日(土) 13:00～16:30
場所：甲南大学18号館3階 講演室
シンポジスト：吉田 敦彦(学習院大学名誉教授/比較神話学)
篠田知和基(広島市立大学/比較文学、ヨーロッパ神話)
坂田千鶴子(東邦学園短期大学/比較文学、日本神話)
依田千百子(摂南大学/比較文学、朝鮮神話)
企画・司会：上村くにこ
※詳細が決まり次第、随時ホームページ等でお知らせします。

研究会

- 第42回 ギリシア悲劇にみる死・狂気・女性なるもの**
日時：2007年6月15日(金) 16:30～
講師：上村くにこ(甲南大学/神話論、ジェンダー論)
企画：横山 博

発行年月日：2007年6月8日



編集後記

この春KIHSは、博士研究員とリサーチアシスタントに新人を迎えました。そして左の写真はKIHS前のテラスで日光浴中の「切手用スポンジ」ですが、これも先日KIHSに来たばかりの“新人”です。今年度、文部科学省学術フロンティア事業としては最後の年となりました。今後もKIHSの活動にご協力、ご支援のほどよろしくお祈いします。